

69

糖尿病性腎症由来血液透析患者の体重管理に及ぼす各種年齢因子および血糖コントロール状態の影響

(総合新川橋病院内科) 大野 敦
(三愛記念クリニック) 横関 一雄
入江 康文
(内科学第三) 伊藤 久雄

【目的】糖尿病性腎症由来の血液透析患者において、体重管理の善し悪しは単に透析中のトラブルの多寡のみならず、生命予後にも大きな影響を与える。一般に糖尿病透析患者では、透析中の血圧が不安定のため、補液等の処置が必要とされることが多い。その原因のひとつに体重の自己管理の悪さが挙げられているが、その管理が不十分となる背景につき検討した報告はあまり見ない。そこで今回我々は、糖尿病透析患者の年齢および血糖のコントロール状況が、透析時の体重増加率に及ぼす影響を及ぼしているかを検討してみた。

【方法】三愛記念クリニックの糖尿病性腎症由来血液透析患者32名において、まず体重管理の指標として、透析開始時体重より前回の透析終了時体重を引き、ドライウエイトで割って求めた体重増加率の1ヵ月分の平均Rを求めた。次に各種年齢因子として、①糖尿病指摘年齢、②透析導入年齢、③調査時年齢、④糖尿病指摘後透析導入までの期間、⑤透析維持期間、⑥糖尿病罹病期間を、また血糖コントロール状態の指標としては、調査した月とその翌月のHbA_{1c}(H)、血清フルクトサミン値(F)を測定し、それぞれRとの相関を見た。

【結果】現在の年齢、透析導入時の年齢および糖尿病指摘後透析に導入されるまでの年数は、いずれもRと負の相関傾向を認めた。一方HおよびFは、その値が高い患者ほどRも高く、有意な正の相関が見られた。

【結論】糖尿病透析患者において、透析時の体重増加率に影響を及ぼす因子を検討したところ、透析導入年齢および調査時年齢が若く、糖尿病指摘後透析導入までの期間が短い患者ほど体重の増加が顕著であった。一方HbA_{1c}および血清フルクトサミンの値が高い血糖コントロールの不良な患者において、体重の管理が不良であった。今後はこれらの患者が体重を増加させる背景をさらに検討すると共に、血糖の改善が体重の自己管理にどの程度の影響を与えるかフォローしていきたい。

70 糖尿病患者における冷水負荷による皮膚温変動のサーモグラフィーによる検討

(内科学第三) 中村 毅、調進一郎、佐藤潤一、須田成彦、小木曾仁、金沢 昭、金沢真雄、能登谷洋子、伊藤久雄

糖尿病患者では、健常者に比べて皮膚温の低下している事が報告されている。今回はサーモグラフィーを用い、上肢の冷水負荷後の皮膚温の変動を観察、皮膚温の変化が、糖尿病患者のどのような因子と強く関連しているかを検討した。被検者は30分間室温に順応させた後、15℃1分間の冷水負荷を行った。皮膚温の測定は左手、第3指中手指節関節背側にて行った。

対象は健常者8例(男性6例、女性2例)平均年齢35歳、糖尿病患者64例(男性46例、女性18例)平均年齢55歳、平均罹病期間は10年であった。

回復率は20分後の温度より、負荷直後の温度をひいたものを、負荷前温度より負荷直後の温度をひいたもので除して計算した。

健常者に比べて、糖尿病患者では負荷前約1℃の皮膚温低下をみ、また冷水負荷後の前値への回復も悪く、負荷前の皮膚温の低い群ほど、皮膚温の回復は悪かった。糖尿病コントロールと皮膚温の回復率の間には、一定の傾向をみなかった。糖尿病罹病期間の長い群と皮膚温の回復率には、一定の傾向をみなかった。

糖尿病性網膜症を正常、単純性、前増殖性及び増殖性の3群に分けて検討したところ、網膜症の進行した群ほど、回復率は悪い傾向をみた。

正中神経の運動神経伝導速度(MCV)、心電図RR間隔変動係数(CV-RR)、上肢振動覚を神経学的指標として検討したところ、神経障害の指標と回復率には、一定の傾向をみなかった。

糖尿病患者の皮膚温の低下する意義については、さらに検討する必要があると考えられた。